

ティ・人と人との結びつきを大切にすることが、かえって着実な、新しい事業の可能性をもたらすのではないのでしょうか」と挨拶させていただきます。

“スワンベーカーリー”小島靖子さんとの出会い

交流会の後で、“スワンベーカーリー”2号店の小島靖子さんと親しくお話しできたことは、最高の収穫でした。

このベーカーリーは、ヤマト福祉財団の小倉昌男さんによる「障害者月給1万円のカベを破ろう」との呼びかけで始まったもので、北区王子養護学校に永く勤められた小島靖子さんが、お母さんたちとともに十条に2号店を開かれました。

2号店は、地理的なハンディを超えて、障害をもつ仲間が厚生労働省を含め、自分たちがつくったパンを「宅配」で届けることによって、着実な成功を収めています(建野友保『小倉昌男の福祉革命』小学館文庫)。小島さんから、さらにこんなことをうかがいました。

障害をもつ仲間は、暗算が不得意。焦ると計算機の計算やおつりもまごつく。そこで、お客さんに「計算して下さい」「おつりをとって下さい」と頼むのだそうです。

地域で人が「共に生きる」なかで成り立つ「商売」の仕方。とてもいいお話しでした。

そしてこのパストラルの清掃を機会に、先生とセンター事業団が会うことになりました。卒業生が、センター事業団の清掃に加わったのです。センター事業団では「出資」を求められる、と聞いて、先生は心配になりました。ところが、その若者のお母さんは、「息子が出資して働けるようになって、本当

にうれしい」とおっしゃったそうです。

「一人ひとりができるかぎり主人公となって働き、生きていく」そんな「協同労働の協同組合」が、小島先生にとってぐっと身近なものに感じられた経験でした。

「日本労協連には、どうやったら入れるんですか」と、小島さんは私に尋ねられました。どうしても「日本版・社会的協同組合」をつくりたい。つくれる、と私は強く感じました。

パストラルのネットワークは、そんな出会いを与えてくれたのです。

小橋さんは、その後、山形県最上郡の鮭川村を訪れ、「鮭川村との交流構想」をまとめられています。労協の事業の中に「農業」や「都市と農村の交流」を位置づけて、この面からもネットワークに参加していきたいものです。



パストラル・ヒューマン・ビジネス・ネットワーク設立の趣旨

都市・農村の交流による新たなライフスタイルとコミュニティの創造をめざして

21世紀の扉が開いたとはいえ、我が国の経済社会は「失われた10年」を経てなおデフレの到来による不況の継続、そして企業のリストラと失業の増大等により先行き不透明感と閉塞感が漂っています。

しかし同時に、人々のニーズや関心は新たな出口を求めて、その大衆的なマグマを溜めているようにも見えます。そして、少子・高齢化社会が到来する中で、一層、物の豊かさよりも、心の豊かさと生活アメニティの充実に向けて変化を遂げつつあります。

時代は、確実に人々の暮らしにも企業にも転換を求めています。例えば大量生産・大量消費の使い捨て型文明から、環境と人間にもやさしい循環・共生型の文明にというように。こうした転換方向に沿って、新世紀にふさわしい新たな日本人の暮らし方（ライフスタイル）とホスピタリティ豊かなコミュニティ創造に寄与するビジネスの領域（フロンティア）を拓くことが、私たちに求められているのではないのでしょうか。

言うまでもなく、そのようなライフスタイルとコミュニティ創造のために不可欠な要素は、健康・自然・環境・福祉・コミュニケーション・生き甲斐・セラピー・家族・地域などであり、これらはいずれも生命の大切さや人間の尊厳、倅せに通じるキーワードでもあります。また、こうした要素の多くは右肩上がりの経済発展の下で、多くの日本人が忘れてしまった田園や、農山漁村を起源とするものでもあります。20世紀の100年間を通じ、都市に蓄積された技術を媒介に、農山漁村に残る多様な生活文化や市場から忘れられた資源を見直し、活用することで今世紀にふさわしい日本人の暮らし方（ライフスタイル）や、コミュニティのデザインと創造に貢献できるのではないのでしょうか。

私たちはこうした思いから、都市と農村における企業・団体・個人のナレッジ・コミュニケーションの場、パストラルH&Bネットワークを設立し、新ビジネスの創造（仕事おこし・地域おこし）に向けたセミナー等を通じ、参加者の皆さんの交流を呼びかけるものです。

平成13年6月

株式会社パストラル 代表取締役社長 小橋暢之